
Psi Lugh(ルー)

ケルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P s i ^ル L u g h

【Nコード】

N 0 2 2 2 Y

【作者名】

ケルタ

【あらすじ】

人に秘められた力『P s i』俗に言う超能力
日本の名も知れぬ科学者によって開発された能力顕現薬。
ルー（L u g h）。

太陽神、全知全能の神、ルーの名を借りた神の薬。
それを服用すると服用者の性質に応じて能力が顕現される。
ルーが発表された翌日、その研究者はルーの作成方法が書かれた一枚の紙を研究所に残し姿を消した。

日本政府はルーを国内のみでの使用し、世界の大国には輸出しない

と発表した。

当然のように巻き起こった日本への制裁。

しかし、ルーを手に入れた日本の敵ではなかった……。

時は流れ、ルー発表から10年後、日本は世界最強の大国へと成長した。

L u g h (前書き)

この物語はフィクションです。

登場する国名、企業および人物名は実際に存在しても関係ありません。

超能力ほしい…なんて考えてたら書き始めました。

L u g h

ルー（L u g h）、今や誰もが知る神の名。

ケルト神話に登場する太陽神で全知全能の神でもあるらしい。

ケルト神話の他の神様の名前なんて知りもしないのに、なぜ知っているのか？

答えは簡単、それが神の薬の名だから。

ジリリリリリリッ！！！！

科学の発展とは裏腹に全く変化がない目覚まし時計の音で目が覚めた。

頭まで被った毛布の隙間から手を出し、手探りで目覚まし時計の停止スイッチを押そうとする。

3回程の空振りを経て、ようやく音が止まった。

数秒の静寂の後、のそのそとベットから起き上がる。

寝ぼけ眼を擦りながら現在の時間を確認する。

8時

それは俺にとって、遅刻、の可能性を意味していた。

「ハッ、ハアハア……」

通学路の全速力で突っ走る。

それが俺にできる遅刻への最後の抵抗だった。

かれこれ10分以上全力で走り続けている。

長い距離を走ったせいか足の感覚がなくなりかけている。それでも俺は足を止めない、とめるわけにはいかない。

今日だけ、今日だけは絶対に遅刻してはいけない。

なぜなら俺の長年の夢が砕けてしまうから。

頭は動かさず、腕に巻いた時計で現在時刻を確認する。

8時14分

これなら、間に合いそうだ。

一瞬気が楽になり、スピードが落ちそうになったが慌てて維持する。それから更に走り続けようやく校門が目の前に見えてきた。

腕の時計を見ず、学園の時計塔の時間を確認する。

「よかった、間に合った」

時間を確認して思わず口から安堵の声が漏れる。

校門を疾風の如く駆け抜け、その速度を保ったまま生徒玄関に滑り込む。

玄関に他の生徒の姿は見られない。

今日が、特別な日だから。

信条と書かれた靴箱から上履きを取り出し、それと同時に靴を脱ぐ。上履きに履き替えた後はひたすら教室に向かってダッシュ。

始業のチャイムが鳴ると同時に俺は教室に転がり込んだ。

文字通り、転がり込んだ。

「ギリ…ギリ…セーフ」

それが口から出る精一杯の言葉だった。

「おう、ギリギリセーフだ。おめでとう健^{けん}」

床に突っ伏して死に掛けている俺の手を握って、起き上がらせながら声をかけてくるのは我がクラスの担任、鹿山^{かやまとしゆき} 俊之

「ありがとうございます」

息を整えながら先生の助けを借りて起き上がり、一言先生に礼を言ってから自分の席へと向かう。

俺が座ると同時にHRが始まる。

「さあーて、健も無事到着したことだし始めるか」

その言葉が先生の口から出た瞬間、クラスはざわつき始めた。例外なく俺も緊張によく似たドキドキ感を感じた。

「今日は、みんな知つてのとおり、能力開発日だ」

「やつとだぜ……いよいよかあ……俺にはどんな能力が?!……」

など、クラスのそこらじゅうから期待に満ち溢れた声が聞こえてくる。

「おい、健」

俺の後ろに座っている昔からの友人、萱場かやばひろ 寛が声をかけてきた。

「なんだ？ 寛」

「俺の能力、なんだと思う？」

子供みたいにキラキラと目を輝かせて聞いて来る。

「知るか、能力が顕現するまでわからないんだから」

……さつきから多くのクラスメートらが口にしてしている能力という言葉。それは所謂超能力チヨウリキって奴で、学者達の間ではP s iサイって呼ばれている。

ちようど10年前に日本の名も知れない学者が匿名で発表したL u

ghルという薬。それを服用するとその個人に応じた能力が顕現する、という物だ。

神の名を借りた、まさに神の薬。

その薬のおかげで日本は世界最大、最強の国になった。

当然、世界からはL u ghルの製造法とサンプルの提供を求められたが日本政府はこれを黙殺。

その行動に怒りを覚えた世界から攻撃を受けるも、L u ghル服用者達の圧倒的火力の前には、それまで世界で最強と呼ばれてきた核兵器でさえも歯が立たなかった。

その戦争はわずか3ヶ月で終息し、日本は被害を最小規模に抑えながらも、世界の大国相手に圧倒的差で勝利した。

その戦争の賠償金から政府はL u ghルを大量生産し、能力者育成プロジェクトを実行。

14歳以上のLugh^ル服用が義務付けられた……

で、その服用日というのが今日、能力開発日なのだ。

「おおおう、気になる、気になるぜえええ」

頭を抑えながら考え始める友人の姿を見ながら俺も自分の能力について想像してみる。

能力には、大まかにわけて3つの種類がある。

創造能力系統、MP（Make Psi）。

変化能力系統、CP（Change Psi）

そして、世界戦争の勝利をもたらした第一要因

戦闘能力系統、BP（Battle Psi）

創造能力系統は作り出す能力、例えば何も無いところから鉄を生み出したり、金を生み出したりする。

この能力のおかげで日本は資源を無限に得ることができる。

俺個人としてはあまり好きではない能力、迫力がないからな。

次に、変化能力系統。

文字通り変える能力、海水を純粋な水に変えたりできるし、その辺の石ころをダイヤモンドに変えることだって、理論上は可能とされている。

この能力も俺はあんまり好きじゃない、これも迫力がない。

最後に、戦闘能力系統。

世界戦争を勝利に導いた第一要因、文字通り戦闘するための能力。

巨大な火球を打ち出したり、雷を起こしたりできる。

日本軍の最高指揮官の持つ能力、神剣^{ブリュナク}という能力はロシア軍を一晚で葬ったとさえ言われる。

勿論、誰もが爆発を起こしたりできるわけではない。

それぞれの能力には等級があつて、能力規模によって格付けされている。

等級の低い能力はたいしたことができない。

最低等級のFランクの能力など、日常生活ですら使い物にならないことだってある。

それに比べて最高等級のSランクは、創造能力なら巨大な金塊を生み出し、変化では石ころをなんにでもかえることができる重^重火器^{火器}にでさえ。

勿論、火器の構造を知らなければ作れないが。

そして戦闘能力、Sランクにもなると一^一国^国を^一単^身で^一つ^ぶす^事が^可き^用になる^と言^う。

まあ、現在Sランク能力保持者はまだ各能力5人ほどしか確認されていないけど。

俺個人としては迫力のある戦闘能力を顕現させたい。

もしかして、Sランク能力だったりして……

そんな淡い期待を抱き、想像を膨らましていると

「んじゃ、これから講堂に移動して、服用上の注意を受けてお待ちかねの服用だ」

その声と同時にクラスメート達はいつせいに講堂へと向かい始めた。俺の能力はなんなのだろう？

改めて考えながら俺も人の流れに流されていった。

「以上で、L^ルu^ッg^ッh服用上での注意の説明を終了する。質問のあるものはL^ルu^ッg^ッhを受け取った後、各クラスの担任に尋ねるように。では、諸君。幸運を祈る」

幸運を祈るって、なんだか戦地に赴く前に言われる言葉みたいだな……そんなどうでもいいことを頭の片隅に考えながらも俺の意識の大部分はクラス担任、鹿山の持つ透明な袋に向けられていた。

いや、正確にはその袋の中身であるL^ルu^ッg^ッhに向けられていた。

「よし、説明も終わったし、今からL^ルu^ッg^ッhを配る。一緒に渡す服用上の注意を改めてよく読むように」

ざわめきがいつそう強まる。

次々と生徒に渡される一枚の書類と一つの錠剤。

俺の順番が回ってきたので担任の下へとLughを受け取りに行く。

「健、お前の能力はどんなものなんだろうな？」

Lughを受け取るときにそんなことを言われた。

なんで俺だけに、と思ったが他の生徒にも言っているようだった。

緊張のし過ぎで聞こえていなかったみたいだ。

我ながら子供だな…実際まだ中学二年生なんだが…

Lughが全生徒に手渡されたのを舞台上から確認した校長が口を開く。

「では！皆さん！一斉にLughを！3…」

いよいよだ…

「2…」

Lughの包装紙を開け、中身を取り出す。

「1…」

それを一度やわらかく握りしめ

「どうぞ！」

校長の言葉で口に含んだ。

L u g h (後書き)

感想、誤字指摘どんどんください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0222y/>

Psi Lugh(ルー)

2011年10月29日17時11分発行